

「月へ行きたいんだ。おれ、リスからヒッチハイクしてきたんだよ」

「おやおや。長かったろうな。何という船に乗っているんだね？」

「知らない。そううまくターミナルでただ乗りできると思うかい？ 貨物船の発着場をあたってみる方がよさそうだな」

「なるほど、ただ乗りするつもりならね。だけど、アルフレッドがやってこなかったら、きみが彼の旅券を使っても多分かまわないだろうな。やっこさんはもう二隻も船に乗り損なっているからね。だいたい自分でもどうして彼を待ってここで立ち往生しているのかわからんよ。わたしたちがいっしょに行く計画を立てたということ以外には」

「月へかい？」

「その通り」

「そりゃあ、しめた」ジョーが顔を輝かせていった。「彼がこなければいいんだが——」

彼はいいよんだ。「これはシンプレックスな考え方だよね？」

「真実はいつでもマルチプレックスだよ」とオズカーがいった。

「そう。彼女もそうだった」

「昼間きみといった御婦人のことかね？」

ジョーは頷いた。

「ところで、彼女は誰なのかね？」

「サン・セヴェリナだよ」

「その名前は聞いたことがあるな。銀河系のこんな渦状肢で彼女は何をしているのかね？」

「ルルを少し買ったんだよ。彼女にはしなくちゃいけない仕事があったから」

「ルルを買ったって、ええ？ ところが彼女はきみに旅券代としてびた一文渡さなかったというのかね？ 月旅行料金の百五十クレジットぐらいはどうにでも融通できると誰しも思うのに」

「いや、彼女はとても気前のいい人だよ」とジョー。「それに彼女はルルを買ったんだから、彼女のことを悪くするのはいけないんだ。彼らを所有することは、とてもとても悲しいことなんだから」

「わたしがルルを買えるほどの金を持っていたとしても」とオズカー。「どうということはない、そう、何もわたしを悲しませはしない。ルルを少しだって？ いったい彼女は何匹買ったんだね？」

「七匹さ」

オズカーが額に手をあてて、ヒューと口笛を鳴らした。「しかもその値段は等比級数的に増加する！ 二匹買うには、一匹を買う四倍の金がかかるのは知ってるだろう。それでも彼女はびた一文くれなかったんだね？」

ジョーは再び頷いた。

「信じられん。そんな話は今まで聞いたことがない。彼女がどれほど途方もなく富裕でなければならぬか、きみにもわかるだろう？」

ジョーは首を横に振った。

「きみはあまり聡明ではないんだね？」

「おれがどれだけかかるのか訊かなかったから、彼女も教えなかったんだ。おれは彼女の船の単なる宇宙船ゴロだったんだからね」

「宇宙船ゴロ？ 刺激的な響きがあるね。わたしもきみぐらいの歳には、いつもそんなことをしてみたかと思っていたんだ。だが、度胸がなかったんだな」でっぷりと太った男は、突然落ち着かなげな表情を浮かべてターミナル内を見回した。「ああ、アルフレッドはやってきそうもないな。彼の旅券を使いなさい。受付に行つて要求すればいいだけだから」

「でもおれはアルフレッドの身分証明をするようなものは何も持っていないんだよ」とジョー。

「アルフレッドは身分証明書など持っていたためしがない。いつでも財布やそんな類たぐいのものを失くしてしまうんだよ。わたしが彼の予約をとつてやる時はいつでも、彼が何ら身分証明に相当するものを持っていないことを条件にしている。だから、きみはただアルフレッド・A・ダグラスだといえればいい。それで旅券はもらえるから。さあ、急いで」

「うん、わかった」彼は人々の間を通り抜けて、事務員のところに行つた。

「すみません」と彼はいった。「A・ダグラスの旅券はありますか？」

受付の事務員はひとわたり名簿に目を通した。「ええ。ちゃんと載ってますよ」ジョーに向かつてにやりと笑う。「地球では相当お楽しみなさつたようですね」

「はあ？」

「この旅券は三日もあなたを待っていたんですよ」

「ああ」とジョー。「いや、ちょっとごたごたがあつてね、それが治まるまで両親に会いたくなかつたんだよ」

事務員は頷き、片眼をつぶってみせた。「これがあなたの旅券です」

「ありがとう」そういって、ジョーはオスカーのところに戻つた。

「次の便はちょうど今乗船中だ」オスカーがいった。「さあ、行こう。やっこさんは別の方法で来るしかないだろうよ」

船上でジョーは尋ねた。「^{ラッシュ}でかぶつ^ツVがまだ月にいるか知ってる？」

「そう願いたいね。わたしの聞いたところでは、彼はどこにも行かないらしいし」

「見つけるのは難しいと思うかい？」

「そうは思わないね。それにしても窓の外は美しい眺めではないかね？」

月のターミナルから出た時も、オスカーはまた別の卑猥な話を事細かに喋っていた。頭上一マイルのところまで円弧を描いているプラスチックドームを、陽光が三日月形に明るく縁どっている。彼らの右手では月の山脈が大きく湾曲しており、背後には緑色のポーカーチップのような地球が天にかかっている。

突如、誰かが叫んだ。「あそこにいるぞー！」

女性が悲鳴をあげ、後じさりした。

「つかまえろ！」別の誰かが叫ぶ。

「いったいぜん……」オスカーがまくしたてようとした。

ジョーはあたりを見回し、習慣的に左手をあげた。だが鉤爪はない。連中は四人——一人は後ろ、一人は前、そして両横に一人ずつ。身をおとしたはずみに、オスカーにどんと突きあたる。するとオスカーはバラバラになってしまった。その破片が、彼の足の周りをぐるぐると回っている。

周りを見回すと、ほかの四人の男も爆発した。そのぶんぶんとうるさく飛び回る破片は、彼の周りを回って取り囲み、その包囲を狭め、他の下船者たちの当惑した顔をぼやかした。と、突然その全部が合体し、彼は恐ろしい暗黒の中に閉じ込められた。意気沮喪しかけた寸前、彼に一条

の光明が差し込んできた。

「ボシー！」誰かが甲高い声をあげた。「ボシー……！」

ジョーはひどく小さな部屋のバブル・チェアに降ろされた。その部屋は動いているように思えたが、はつきりそうとはいきれなかった。もとオスカーだった声があった。「エイプリル・フルだ。驚いたかね」

「くそっ！」ジョーは叫んで立ちあがった。「いったいどうなってんだ——どうなってるんだ？」

「エイプリル・フルだ」その声は繰り返していった。「わたしの誕生日でもある。きみは混乱しているようだ。でもすっかり度胆を抜かれたわけではないんだろ？」

「死ぬほどこわかったぞ。これはどういうことだ？ おまえは誰なんだ？」

「わたしはへでかぶつV」とへでかぶつVがいった。「きみは知ってると思ってたんだがな」

「何を知ってるって？」

「オスカーやアルフレッドやボシーなんかの役割をだよ(オスカー・ワイルドはアルフレッド・ダグラスと有。名な男色事件を起こした。ボシーはダグラスの愛称)

ともに楽しんでくれているものと思っていた」

「何を楽しめっていうんだ？ おれはどこにいるんだ？」

「もちろん、月だよ。きみがここに来るのにそれが賢明な方法だと思ったんでね。サン・セヴェリナはきみの料金を払ってくれなかった。彼女はわたしがしてくれるだろうと考えたのだ。それ

で、わたしがその勘定をたてかえたんだから、少しは楽しませてもらわなければ割に合わない。

ぴんとこなかったかね？」

「何が来るって？」

「ただの言い回しだよ。よくやることなんだ」

「そうかい、次回は気をつけておくれよ。ところで、きみは何者なんだ？」

「どこにでも存在する言語マルチ・プレックスだ。きみにとっては入でかぶつVだよ」

「一種のコンピュータなの？」

「うーむ。まあ、そんなところだな」

「それで、これからどうなるんだい？」

「きみはわたしに相談するだろう」と入でかぶつV。「そしてわたしが手助けをする」

「おお」とジョー。

バブル・チェアの後ろからくすくす笑いがして、ディクが姿を見せ、ジョーの前に坐ると、非難するように彼を見た。

「おれをどこへ連れて行ってるんだい？」

「わたしの中央コンソールへだ。そこで休養しながら計画を立てればよい。坐ってくつろいだらどうかね。三、四分もすれば着くから」

ジョーは坐り直した。が、くつろげなかった。それで、オカリナを取り出し、前面の壁にドアが開くまで吹き続けた。

「さあさあ、到着だ、その日のうちに帰れるとはね」と入でかぶつVがいった。「入ってくれな
いか？」

「おれは」——コンソールにケープを投げつける——「こうしちや」——ガラス壁に小物袋を投げつける——「いられないんだ！」最後はデイクへの飛び蹴り。だが、デイクが身をかわしたので、ジョーは危うく転びそうになった。

「誰がきみの邪魔をしているんだね？」ハでかぶつVが尋ねた。

「くそつ、きみじゃないか」ジョーが唸った。「なあ、おれはもうここに三週間もいるんだぜ。」

「くそつ、きみじゃないか」ジョーが唸った。「なあ、おれはもうここに三週間もいるんだぜ。きみは、おれが出て行くこうとするたびに、あのえんえん九時間もの馬鹿馬鹿しい話し合いをして、それですっかりおれをくたびれさせてしまうんだ」彼は広間を横切ってケープを拾いあげた。

「その通り、おれはまぬけだよ。でも、どうしてきみはそんなことを繰り返して楽しむんだ？」

おれは未開惑星出身のノープレックスなんだから、仕方がないこと——」

「きみはノープレックスじゃない」とハでかぶつV。「きみのもの見方はもう完全なコンプレ

ックスだ——古いシンプレックス観に対するわからなくもないノスタルジアを、まだたくさん抱えてはいるがね。時々きみはそれを議論にも持ち出そうとする。あの時、見かけ上の現在

(ある人にとっての現在が、他人にとっては過去の主観的現在。)の理解を阻んでいる心理要因をわれわれが議論していた時も、

きみが頑固に——」

「いや、ちがう、きみは間違ってる！」とジョー。「おれは別のものになるつもりなどないんだ」そのとき彼は広間の反対側に転がった小物袋を拾っていた。「おれは出て行く。デイク、行こうぜ」

「きみは」と普通より威厳をこめてハでかぶつVがいった。「愚かになりつつある」

「そう、おれはシンプレックスだ。今でもそのままなのさ」

「知識とプレックスに相関関係はない」

「きみが四日間かけて動かし方を教えてくれた宇宙船もある」ジョーはガラス壁の向こうを指さしていった。「おれがここにきたその晩に、催眠記憶でおれの頭ん中に道筋も植えつけてくれている。いったいぜんたい何がおれを止めているというんだ？」

「何もきみを止めてはいない」とハでかぶつVが答えた。「だから、そういう考えを念頭から追いつせば、きみは落ち着いてこのことをじっくりと考えられるのに」

腹をたてたジョーは、チェック・ランプやプログラム修正用キイボードが点滅する、六十フィ

トものマイクロリンクやロジック・ブロックの壁に面と向かった。「ハでかぶつゝ、おれはここが好きだ。きみは友だちとしては偉大だ、実際、そうなんだ。しかも、食い物も運動も全部与えられている。だけど、おれは気が狂いそうなんだ。このままきみを残して出て行くのがたやすいことだとも思ってるのかい？」

「そう感情的になりなさんな」とハでかぶつゝ。「わたしはその手の処理向きに作られていないんだから」

「宇宙船ゴロをやめてから、今までの人生のどの時期よりも、おれが仕事をしていないことをきみは知ってるかい？」

「きみはまたどの時期よりも変わったのだ」

「なあ、ハでかぶつゝ、わがらうとしてくれよ」彼はケープを落としてコンソールに戻った。それはマホガニー製の大机だった。彼は椅子を引き出すと、その下に這い込み、膝を抱いた。「ハでかぶつゝ、きみが理解しているとは思わない。だから、聞いてくれ。きみはここにいながらにして、銀河系のこの渦状肢中のすべての図書館や博物館とつながっている。きみにはまたたくさん友人もいる、サン・セヴェリナのような人やいつもきみのところに立ち寄っていく人たちだ。

きみは本を書き、音楽を作り、絵を描く。だけど、図書館もないし、テレシアターも一軒だけで、土曜日の晩に酔っ払う以外にすることがなく、四人ほどこしか大学に行ったことのある者はおらず、

金儲けにあくせくしていきみが会うこともないような人々がいて、誰もが誰の仕事のことも知っている、そんな小さな単一生産社会にいたら、きみは幸せでいられたと思うかい？」

「いや」

「でもおれはそうだったんだよ、ハでかぶつゝ」

「では、どうしてきみは出てきたんだ？」

「そりゃあ、伝言のせいで、それにおれの知らないものがたくさんあると思ったからだ。おれに出て行く用意ができていたとは思わいがね。とにかく、そこじゃきみは幸せではいられない。だがおれはいられた。ことはそれほど単純だけど、きみが充分に理解しているとはとても思えないんだ」

「わたしはしているよ」とハでかぶつゝ。「きみがそういうところで幸せであってくれたらと思う。なぜなら宇宙はほとんどそんなところばかりだからだ。きみはそういうところで人生の大半を過ごすことになっていたのだから、そこを樂しめなかつたら、むしろ悲しいことになっただろう」

デイクが机の下を覗き込み、ジョーの膝に飛びのってきた。机の下は常時十度も暖かく、温血動物のデイクとジョーにとっては、別々であれいっしょであれ、何度となく潜り込んだ素敵な場所なのである。

「今度はきみが聞く番だ」△でかぶつ▽がいった。

ジョーは机の側面に頭をもたせかけた。デイクが膝から飛び出していき、すぐにプラスチック製の小物袋を引きずって戻ってきた。ジョーはそれを開けてオカリナを取り出した。

「わたしのいいたいことは、もうほとんどきみに話している。だがきみにはわたしに尋ねることがあるはずだ。きみはまだほとんど質問していないからね。きみがわたしのことを知っているよりもずっと、わたしはきみのことを知っている。そしてわれわれが友人なら——それはきみにとつてもわたしにとつても非常に大切なことだ——こういう状態は改めるべきなのだ」

ジョーはオカリナを降ろした。「その通りだ——△でかぶつ▽、おれはきみのことを知らなすぎ。きみはどこ出身なんだい？」

「わたしは、瀕死のルルがその遊離していく意識を収納するために作ったものなのだ」

「ルルだって？」ジョーが訊く。

「彼らのことを忘れかけていたのかね？」

「いや、そうじゃない」

「つまり、わたしの意識はルルの意識なんだ」

「だけどきみはおれを悲しくさせないぜ」

「わたしは半分ルルで半分機械だ。だから保護はされていないのだ」

「きみがルルだって？」ジョーは信じられないとでもいうように再び訊いた。「全然思いもしなかったなあ。でもそれをおれにいったからといって、それでどういう違いがあるというんだい？」
「まあ、そういうことだな」△でかぶつ▽。「だが、きみがきみの親友のことをいいだしたら、わたしはきみを尊敬しはしないからね」

「おれの親友がどうしたって？」とジョー。

「また別の言い回しだよ。わからなくてもいいんだ」

「△でかぶつ▽、どうしておれたちはいっしょに行かないんだい？」突然ジョーがいいだした。

「おれは出発する——そう決心したんだ。どうしていっしょに来ないんだ？」

「いい考えだ。きみがそういうとは思っていなかった。とにかく、それがここから出て行く唯一の方法なのだ。むろんわれわれの向かう星域はルルの解放にひどく敵対的だ。そこはもう帝国の直轄領なのだから。彼らはルルを保護しており、その保護に背を向けて、ひとり自由のまままでいようとすると、彼らにかなりの動揺を引き起こす。彼らのすることには相当むごいものがあるという話だからね」

「じゃあ、訊いてくるやつがいたら、きみはただのコンピュータだといえればいいさ。だって、おれもきみがいわなければわからなかったもの」

「わたしはいうつもりなどない」△でかぶつ▽がきっぱりといった。

「なら、きみはコンピュータだとおれが、い、つて、やるよ。さあ出かけようや。こんなことしてたら、何時間もここにいななくちゃならない。また議論を始めてるみたいだからな」彼は机の下から出て、ドアに向かった。

「コメント?」

ジョーは立ち止まり、肩ごしに振り返った。「何だい? まさか気が変わったというんじゃないだろうね?」

「いや、ちがうよ。もちろんわたしは行くつもりだ。だが……つまり、わたしが——正直にいう——通りをのそのそと歩いてたら、『おや、どこにでも存在する言語マルチ・プレックスがあるそこを歩いている』と、人々は本当にいうと思うかい? そしてルルだとは思わないだろうか?」

「おれが何かいうとしたら、そういうだろうな」

「わかった。ジャーナル広場^{スタグナ}まで輸送流^{チェューブ}に乗って行けばいい。そこで四十分後に会おう」

亀裂が走った月面の塵埃平原を卵形宇宙船に向かって走るジョーの後を、ディクは八本足で追いかけていった。

輸送流^{チェューブ}とは、冥王星の彼方までたちまちのうちに船を運んでいく人工の静止空間流^{ステイシス・カレント}のことである。そこまで行けば濃密な太陽系塵^{ソラーダスト}による損傷を恐れずに太陽系を後にできるわけだ。

そこには、各辺約十マイルの巨大なプラスチック厚板があり、その上には建物と大気と、そしていくつかの娯楽区域が設けられていた。ジョーは船を横町に停め、冷え冷えとした大気の中に踏み出た。

広場では兵士たちが隊形訓練を行っていた。

「何であんなことをしているんだい?」近くで休憩している制服姿の男に尋ねてみた。

「あれは帝国軍の野戦旅団だ。二、三日中には出ていくよ。ここには長くないから」

「おれは別に文句をいってるわけじゃない」とジョー。「ただ興味があるだけなのさ」

「そうかい」とその兵士はいっただけで、それ以上何もいってくれなかった。

「どこへ行くんだい?」しばらくしてジョーが訊いた。

「あんな」しつこい子供を相手にするように、兵士はジョーの方を向いていった。「帝国軍のことは、じかに見れること以外すべて秘密なんだ。連中がどこへ行こうとおまえには関係ないんだから、そんなことは忘れちまいな。もし関係あるというんなら、ナクター王子に許可をもらってからにしてくれ」

「ナクターって?」ジョーが訊く。

「あの人だ」兵士は歩兵小隊を指揮している色の黒い山羊髭の男を指さした。

「おれにはあまり関係ないんだよ」とジョー。

兵士は愛想つかしの視線を送ると、立ち上がり、歩き去った。黒のケープが男たちのきびきびした方向転換に合わせて翻る。

そのとき、見物人の間にどよめきが起こった。空を見上げ、指をさし、興奮して喋り始める。広場に向かってきりもみ降下してくるそれは、太陽を覆い隠し、次第に大きくなっていった。それはほぼ立方体といってよく、しかも——巨大であった！一つの面が見えると別の面が見えなくなる。突然ジョーはそいつの大きさを知った。各辺がゆうに四分の一マイルはあったのだ。それは広場にぶちあたり、ジョーや兵隊たちを、そして高い建物を一つなぎ倒した。大混乱が起こり、サイレンが鳴り響き、人々がその物体の周りで右往左往した。

ジョーはその方に駆け出した。低重力のおかげでかなり速くそこにたどり着けた。その区域を中心に、広場には大きな裂け目が数本走っている。その一本を跳び越えた時には、下に星が見えた。

息をのんで反対側に降りると、少し歩調を緩めた。その物体は煮えくり返るある種のゼリーで覆われていた。そのゼリーにはどこか見覚えがあるように思ったが、どこではわからなかった。その暖かな湯気をあげている泥水をすかして、彼の方に向いた物体の面がガラスでできているのが見分けられた。そしてその奥に、冥王星の薄明かりにぼんやりと、マイクロリンクやロジック・ブロックが、チェック・ランプのかすかなきらめきが見える。

「へでかぶつゝ！」ジョーは前に走り出しながら叫んだ。

「いいいっ」ゼリーに押し殺されたなじみのある声が聞こえてきた。「わたしは注意をひかないようにしているんだ」

今ではもう兵士たちが近づいてきていた。「とにかく、いったいあいつは何なんだい？」と一人がいった。

「あれはどこにでも存在する言語マルチ・プレックスだ」と別の兵士が答えた。

尋ねた兵士は頭をかきながら、その壁の大きさをじろじろと眺めた。「地獄みたいはどこにでも存在するってんだな？」

三人目の兵士は広場の裂け目を調べていた。「こいつを直すにはあのくそつたれのルルを使わなくちゃならんと思うかい？」

へでかぶつゝが小声でいった。「連中の一人にわたしに面と向かって何かいってみるといってやってくれ。一人だけでいい——」

「ああ、黙って」とジョー。「でないとおれの娘と結婚させないぞ」

「それがどういう意味か知ってるのかね？」

「単なる言い回しさ」とジョー。「先週きみが居眠りしてる間に少し読書したんだよ」

「おもしろい、非常におもしろい」とへでかぶつゝ。

兵士たちが立ち去り始めた。「ルルなんて手に入るもんか」とその一人が耳をかきながらいった。「これは兵隊の仕事だよ。とにかくおれたちが全部直して回らなくちゃならんのさ。だけど、近くにくそつたれのルルでもいたらなあ」

△でかぶつ△のチェック・ランプがいくつかゼリーの奥で色を変えた。

「いつたいきみを覆ってるそれは何なんだい？」ジョーが後ろにさがりながら尋ねた。

「わたしの宇宙船だよ」と△でかぶつ△。「有機宇宙船を使っているんだ。わたしのように生命のないものにとっては、すごく快適なものなんだよ。今までにこういうものを見たことはないのかね？」

「そう——いや！　リスであった。それでトリトヴィアンやら何やかやがやってきたんだ」

「おかしいな」と△でかぶつ△。「彼らは普通有機宇宙船を使わないんだがな。特に生命がないというわけではないんだからね」

コンピュータの周りには大ぜいの人々が集まってきていた。サイレンも近づいてくる。

「ここから出よう」ジョーがいった。「きみは大丈夫なのかい？」

「大丈夫だ」と△でかぶつ△。「ただ広場の方が心配だな」

「血まみれだけど降参はしていない」とジョー。「これも言い回しだよ。先に行ってくれ、タンタマウンドで会おう」

「わかった」と△でかぶつ△。「後ろへさがってくれ。離陸する」

ぶつぶつという音、そしてすさまじい吸い込み、ジョーが風の中でよろめく。再び人々が叫び声をあげた。

場面は変わってジョーの船。ディクが前足で頭をおさえて、ダッシュボードの下に隠れている。ジョーが離陸ボタンを押すと、ロボ乗組員があとを引き継いだ。広場の混乱が眼下になる。超静止空間状態に目を通し、そして彼は跳躍の合図を送った。

静止空間発生機が唸り、船が超静止空間に滑り込み始めた。ところが、滑り込みを終える前に船は急に傾き、彼は激しくダッシュボードに叩きつけられた。手首が衝撃を受け、はずみをくらって彼はふつとぶ。ディクが金切り声をあげる。

「進行方向に気をつけていなさい」スピーカーから声がした。